

私の戦争体験～戦後五十周年に寄せて～

佐賀県唐津市 山口 弘子

戦後もう50年もたつのですね。私が小学校6年生の時が終戦でした。私の住む佐賀県唐津市は直接の空襲こそ受けませんでした。それは大変な時代でした。父は軍属で徴用されました。祖父母に母、子供6人合計9人の大家族での生活でした。近所の家も似たりよったりの家族が多く、みんな貧乏でした。当時の軍部に洗脳された国民学校の子供とえば、『イザという時はきっと神風が吹く、絶対に戦争に負けることはない』と信じて疑いませんでした。運動場には芋を植え、また防空壕を子供達も掘らねばなりません。B29が上空を通過して毎日が空襲でした。

お腹がいつも空いていますし、夜はまた空襲警報、眠い日々でした。当時2才の弟は空襲のサイレンが響くと、防空ズキンと負い紐を引きずって「姉ちゃん、オンブ」と私を起こしに来ます。私は眠いので「もう防空壕など入らんでよか」といいながら眠ったふりをするのですが、「おんぶ、おんぶ」と背中につかまります。眠い目をこすりながら隣組の大きな防空壕に入り、弟、妹を両手につなぎ、一人を背負って行かねばなりません。母は当座の食糧と衣類等を庭に掘った壕の中につめ込み終わってから、私たちのところに来るのですが、壕の中に品物を入れておくと湿気で大変なのです。空襲の度に出したり入れたり、一家9人分の荷物の出し入れは大変だったと思います。

ある空襲の夜です。『いやに東の空が明るいなあ』とっていると、そのうちに光がいくすじも空に走り、地面が明るくなり、唐津から見える夜の山にさえぎられていても空は真赤になり、まるで音のない花火が暗い夜空に浮かび上がりながら、何時間も燃えるのが見えました。それが福岡の大空襲でした。

小学校もあまり授業ができなくなり、家庭学習が多く、近くの子供が集って勉強することになったのですが、遊びばかりでまたそれが楽しいものでした。『でもやはり学校に行きたい。みんなと勉強したい。ナギナタの練習をしたい』。あれを振り廻すと少し強くなった気がして大好きでした。

ある日の掃除の時のことです。当時の小学校には、『奉安殿（ほうあんでん）』という天皇と皇后の写真に教育勅語をお祀りした御社がありました。いつもきれいにほうきの目が立てられ、清められていました。そこの掃除をする人は選ばれた行儀の良い女の子が3人位です。私も選ばれ、ウヤウヤしくやっていたのですが、御社の後に大きな山桃の木がありました。梅雨の季節に近づくとたくさんの実をつけます。地面に落ちていて蟻がいかにもおいしそうに食べています。蟻を払いながら拾っていたのですが、お腹を空かしている子供です。木に登って新しい実を食べたらと考え、悪いとは知りつついつの間にか登って食べていたのです。「コラーッ」と言う大声に飛び降りました。「奉安殿を上からみ下し、踏みつけにするとはい言

語道断」とこっぴどくしられました。しかれてる間、『どうしよう、どんな罰があたるかしら』と考えながらも、『おいしかったなあ、もう少し食べたかった、もう二度と食べる事もできないだろう』と思いながらしかられていました。それから2ヶ月位で終戦になりました。『私達があの木に登ったから日本が負けたのではないかね』とあの時の3人はまじめに悩みました。

8月15日、天皇の御言葉がありました。隣組の班長さんのところに集まって聞いたのですが、雑音と難しい御言葉は子供の私にははっきりわかりませんでした。今日からは空襲も来ないと思っていたら、夜またサイレンです。「何が起こるかわからないからかくれなさい。飛行機が飛んでいるとのことでした。あくる日隣組の集まりがあり、『唐津は港町だから上陸してきた兵隊にどんな目にあわされるかわからない。疎開する様に。汽車はタダで運んでくれる』とのことでした。私達は母の従兄弟をたより、厳木に行くことになりました。母は日用品を大八車に積んで、下の弟を背負って、25km位あると思いますが歩いて来ると言うのです。私が、妹弟、一行4人連れで汽車に乗って行くのですが、下の5才の弟は当時靴がありませんから下駄でしたが、前日には歯替屋さんに歯替えしてもらった古下駄を抱いて持って行くと言います。「そんなもの置いて来い」といくら言っても聞きません。「母が一番大切だもんね」と笑いながら「持って行かんね」と言います。私は母から「みんなを頼んだよ。みんなも姉ちゃんの言うことをよく聞くのよ」と励まされ、心細いながら出発しました。

厳木駅に着くと、永い夏の日も暮れていつもなら何か食べている時間なのだと思います。一行は歩き出しました。これから昼間でも私で40分はかかるから、小さな子がいるし、『1時間位かなあ』と考えながら田舎道にさしかかりました。暗さと心細さに妹も弟も私の手をしっかりとぎっています。下の弟が立ち止り、目をまんまるにしてべそをかき、「姉ちゃん、あれは何ね」とあごをつき出しおびえています。4人共こわいののですが、私が一番姉ちゃんだと必死です。木の枝が顔をなでる様に近くでゆらぎ、空も回りも暗く、立ち止るとみんな何かにさらわれてしまいそうです。前の方から何かのあかりがチラチラと見えかくれしながら近づいて来ます。「なくな、止まっちゃいかん」と叫ぶ様に言いつつ歩いて行きました。提燈の灯でした。道もわからぬぐらいに暗くなって来ました。浦川内までまだ半分も歩いていません。行き過ぎようとした提燈がサッと私達にかざされたので、全員が息をのみました。「畳屋の子供達じゃなかね」と灯の主が声を掛けてきました（私の父は畳屋でした）。今からたずねていく家のおじさんが、疎開の噂を聞いてもしやと思い、迎えに来てくれていたのです。ホットして、うれしくて、今もあの時の感謝の気持ちは忘れません。

父も無事に徴用から帰り、戦後に2人の弟妹がふえて、12人家族となり、この大家族の食糧を調達する両親は良く働いてくれました。母は食糧不足で母乳が出なくなり、牛乳を買わねばなりません。簡単に入りません。早朝、峠を越え遠くまで私が買いに行かされるのですが、「もう今日は売り切れで無いよ」と売ってくれないのです。ねばってみるのですが良い顔をしてくれません。母の困った顔、弟の泣き声を思い出し、シクシクなき出しました。困った

牧場の方は、牛から無理にしぼってわけてくれました。うれしくて飛んでかえって来ました。私が大人になっても、牧場の方は、泣かれて困ったと笑いながら話していました。

このようにして成長した弟達も、校長先生や、県庁の次長さん、民間会社の部長さん、等々それぞれ8人の兄弟姉妹が全員健康に暮らし、平和のありがたさを何よりありがたく幸せに生活しています。